

5

消費生活センターにおいて判断力の低下を疑い、地域包括支援センターの継続的な見守りにつないだ事例

80歳代、一人暮らしの女性が初めて消費生活センターの窓口に来所し、「以前から、誰かが自分の部屋に勝手に入ったようでモノが無くなっている。警察に相談に行き、対処方法を教えてもらったが、侵入の有無は確認できなかった。どうしたらいいか」と相談した。

センターでは判断力の低下からくる被害妄想を疑い、本人同意を取って地域包括支援センター（包括）に情報提供し、包括が自宅訪問を行って本人の状況を確認した。女性から、「誰かにカギを勝手に作られた」との訴えもあったことから、包括では今後も引き続きの見守りが必要と判断した。

センターからの情報提供をきっかけに包括につながることとなり、継続的な見守りによる支援が決定された。その後、当該女性からの同様の相談はない。